土佐派と京都御所

榊原吉郎

一

土佐派の絵師たちは、克明に粉本を遺してきた。

現在本学に収蔵されている京都御所関係の粉本は、紫宸殿、清涼殿、御常御殿、参内殿、皇后御常御殿、などの空間を飾った障壁画の実物大の下絵から縮小された小下絵に至るものが含まれ、それぞれの形式も一枚ものから、巻子本、冊子本など様々な姿で伝えられている。

土佐派と京都御所との関係を想起してみても、時代により様々な様相を示しており、単純に考えることができないのである。

京都御所は平安京が造営された時期の大内裏の中にあった皇居から始り、度重なる火災や争乱により、その敷地の変遷を重ねてきた。

今日我々が眼にする石垣と樹木に囲まれた広大な敷地の中の京都御所は、里内裏の一つであった東洞院土御門殿の跡地が一八世紀の末、寛政の造営によって皇居になったのであり、更にその敷地の中には京都御所以外にも大宮御所、仙洞御所がある。それぞれ各御殿などの由来ともなれば簡単にその全貌を見通すことは難しい。

また、土佐派についても、室町時代の初期に土佐行広から始る大和絵の伝統を継承した画派であり、従四位下と絵師として最高の位に付いた土佐光信によって画派としても確立したのである。だが、本学には一六・七世紀以後の土佐派画人が描きのこした粉本が現存しているにすぎず、近世土佐派に焦点を絞らねばならない。

従って、ここでは一六・七世紀以後の土佐派と京都御所との係わりを、藤岡通夫氏の名著『京都御所』を手掛りにその変遷をたどり、本学に残る土佐派粉本との関係を概略することにする。

二

天正一八年(一五九〇)に造営した豊臣秀吉が織田信長にならい、天下を統一した京都御所の様子は勝興寺本『洛中洛外図』屏風によって僅かに知ることができる。

しかし、これは文禄五年(一五九六)の大地震による被害を受けたため、慶長一一年(一六〇六)頃から徳川家康が修復造営を始め、一応の完了を見たのが同一八年(一六一三)である。その後、二代将軍・徳川秀忠は娘和子(東福門院)の入内にともなう女御御所を元和五年(一六一九)に完成させた。

更に江戸幕府は寛永一八年(一六四一)再度内裏造営に着手し、翌一九年には完成させている。その後も度重なる火災により焼失した内裏の造営を次々と進め、承応三年(一六五四)、寛文二年(一六六二)、延宝二年(一六七四)と、一七世紀の江戸幕府は七回にわたって作事奉行を勤めることとなった。

一八世紀に入ると、宝永五年(一七〇八)の大火後、造営された京都御所は八〇年間維持されたが、しかし、天明八年(一七八八)の大火で焼失した内裏を、幕府は再建に着手し、直ちに老中・松平定信を惣奉行に命じ、根本的に大改造する計画を進めた。定信は昌平黌の教官柴野栗山に古典研究を指示し、裏松固禅の『大内裏図考証』、すなわち平安京の大内裏における皇居の原型を考証した研究をもとに、その造営を始めた。これが寛政度の造営であり、現在眼にすることのできる京都御所の原型が成立したといってよい。

幕末の嘉永七年(一八五四)の火災後、翌年の安政二年三月から再建が始り年内に完工した造営は、今日眼にすることのできる御殿が建立され、そこに一九世紀中頃の障壁画が残されている。これについては後に述べる。

三

天正度の造営に参画したのは狩野派の絵師を中心としていたと考えられる。南禅寺大方丈は、慶長度造営に際し清涼殿が南禅寺に移築されたたてものであり、

そこには『二四孝図』と『群仙図』が描かれている。その作風は狩野派を示し、狩野永徳の作と伝える。作者問題は別として、天正度造営に参加した絵師が狩野派であったことは認めねばならないであろう。

近世土佐派を復興させた土佐光起〔元和三年一六一六生〕は生まれてもおらず、父光則も堺で幼少時代を送っていたに過ぎない。その父土佐光吉もまた堺の豪商たち、天王寺屋宗閑・紅屋宗陽・今井宗久・小西如清などの肖像を手掛けていたことが粉本によって判明するが、堺の町を離れることもできず、この造営には加わっていないと推測される。勿論、この頃の京都御所に関する土佐派粉本は本学には現存していない。

慶長の造営に係わった絵師が、狩野永徳亡き後、その季子である右近将監孝信が中核となったことは『禁中御位ノ御所様覚』や狩野派の記録・『本朝画史』によっても解るが、この慶長度の紫宸殿が御室仁和寺の金堂として現存し、紫宸殿を飾った賢聖障子も残されており、孝信の手になることが判明している。

元和の女御御所造営では、すでに孝信は没し、そこで活躍した四郎次郎・甚丞・采女・好意・左兵衛の名が『元和年中禁中女御様御対面御殿』に記録されている。狩野派の宗家である狩野四郎次郎貞信を筆頭に、狩野甚之丞、狩野探幽守信(采女)、狩野興以などが活躍する時期へと展開して行くが、まだ土佐派の絵師の名は登場してこない。貞信たちが描いた画題については、女御御里御所の御常御殿の画題が知られる。寛永一三年に近衛邸に女御御里御所の建物が移築され、安芸の宮島、洛中洛外名所などの名所絵で飾られていたことが、皇女二宮と権大納言近衛尚嗣との婚礼の記録によって知ることができる。

残念ながら、本学の粉本には写生帖など年代の判明する資料が現存するが、この時の御所関係のものはない。

寛永度の御造営に参画した絵師は、江戸狩野の三兄弟すなわち長男探幽守信・次男主馬尚信・宗家を嗣いだ三男右京安信であり、指揮は探幽守信がとり、それぞれの門弟たちが分担している様子が『禁中御位御所所々御殿絵付之帳』に記録されている。この記録に京狩野の名前が記録されていないこと、土佐派の絵師の名前もまだ登場してこない点など幕府と江戸狩野との結びつきの強さを物語る、と同時にこの時期を象徴している、といえよう。

承応度の造営については、『禁中諸式代銀奥書留帳』や『禁中御絵画工記』によって、絵師たちの名前や支払われた画料、画題なども判明する。やはり探幽が主導権を握っていたことは間違いなく、宗家の永真安信、探幽の養子洞雲益信、更に主馬尚信の嫡子養朴常信など江戸狩野の名が網羅されている。がしかし、京狩野の狩野縫之助永納、狩野派を学んだ海北友雪の名前も同時に記録され、承応三年左近将監となった土佐光起、後に住吉を名乗る土佐内記、更に衛士土佐の名までが登場してきたことは時代の移り変りが進行していることを示しているものとして注目せねばならない。

本学の資料には、まだこの時の粉本を見出せない。

寛文度の造営は記録『禁裡新院御殿御絵之付』から、絵師と画題を知ることができるが、この時も探幽の力はまだ強く、『禁裡御作事絵師筆之覚』によれば探幽が基準の三割増しを受領している。つまり、紫宸殿の賢聖障子、清涼殿御帳間に『孔雀』、常御殿の御三間上段に『扇流』などを探幽が描き、御所の重要な所の絵を探幽が担当しているからである。

ここにも、土佐派の絵師が加わってはいるが、主要な所は江戸狩野と京狩野が受持ち、海北派と共にあまり重要度の高い所には参加していない。この点土佐派の力が狩野派に及ばなかったことを示す。

延宝度御造営に関する絵画資料には、『古画備考』に採録された『禁裡御造営部類』がある。それによると、江戸狩野宗家の永真安信が紫宸殿の賢聖障子を手掛けており、中心的人物であったことが解る。しかし、安信も老齢であり、その子右京時信・安信の娘婿であり探幽の養子でもある洞雲益信たちが安信を補佐していた。京狩野の縫殿介永納、海北友雪の名を見出すこともできるが、土佐派の画人の名を見ることはできない。

一八世紀の御造営は、世紀始めの宝永五年の火災による再建と世紀末の天明八年の大火後の再興すなわち寛政度御造営の二度にわたる造営である。

宝永度の『禁裏御絵割並坪附』には、絵師別に場所・画題などが記録されており、それによれば、やはり江戸狩野が中心的な場所を担当しているが、宗家も

世代交代し、永真安信の孫である永叔主信が中核となり、その補佐をするのが探幽の子探信守政、洞雲の養子洞春福信たちである。京狩野も永納の孫・縫殿助永伯が参加し、江戸狩野から別れた鶴沢探山も登場してきている。土佐派も左近将監光祐が参画し、常御殿御三間に『栄花物語』、杉戸に『鵜越・藤戸・韃靼人・紅葉に鹿』図などを描いている。また、土佐藤満丸の名が記され、常御殿の杉戸に『柳山雀・錺馬・鷹狩・花籠』図を描いているが、藤満丸は土佐光芳の幼名ではないかと推測される。

本学の粉本中には直接に、この時期の御所の図柄を示すものはないが、物語の粉本や光芳の手になる粉本なども残されており、土佐派の画人が画題、様式に対してどのように理解していたかを類推できるのではないかと考えている。

寛政度の御造営は徳川幕府の総力を挙げてなされた事業であった。さすがにこの時の記録は多く残されている。各殿舎を担当した絵師と画題について一般に知られる『寛政御造営記』によると、中心の紫宸殿賢聖障子は江戸木挽町の栄川院狩野典信が受け持っていたが、下絵を創り、京都で仕事に掛かる途中病没し、その後を住吉内記広行が担当した。従って、江戸狩野の影響力が消え、派殿では土佐土佐守光信・土佐左近将監光時・土佐虎若丸たちが彩管を振るう華やかな場となっている。また、常御殿にいたると、狩野派は鶴沢探山の跡を嗣ぐ鶴沢探索、鶴沢門下の石田幽汀、さらにその門人であった円山応挙や岸派を開く岸雅楽之助の名前を発見することができると、同時にそこに光貞の門人田中訥言も筆を取っているのである。

そのほか、今日我々に馴染みの多い絵師たちの名を挙げて見ると、円山応瑞、長沢芦雪、駒井源琦、原在中、奥文鳴など、これまで御所に出入りもできなかった町絵師の名前が連なり、時代が大きく変化したことを示す。

この時期、江戸の狩野派には御所の障壁を飾る力量を持った絵師がいなくなり、流派としての実力が低下し、専ら上方の絵師の力に頼らなくならざるをえない状況が生まれていたのである。今回展示している土佐光貞の下絵類が、その状況を良く示しているといえる。

本学の土佐派粉本には、古いものはこの時期の光貞・光時・光孚の手になるものがあり、一九世紀中頃の安政度御造営の資料を含み内裏障壁画関係として約一五〇点の資料が残されているが、御所に現存する障壁画の研究に欠くことのできない資料といえる。

安政度御造営に関しては、『安政之度禁裏准后御造営御用掛人名録』・『安政新造内裏記』によって障壁画の筆者、画題などが判明しており、主なる所を住吉内記弘貫、土佐光清・土佐光文・土佐光武など大和絵系の絵師が担当している。寛政度よりよりいっそう狩野派の衰退が目立ち、京都の町絵師たちの参画が際立っていることに気付かされる。無論京狩野の狩野永岳、鶴沢探真、鶴沢派からでた勝山琢文などの名も見えるが、原在照・梅戸在親・岸連山・岸岱・岸竹堂・円山応立・国井応文・駒井孝礼・中島来章・森寛斎・横山清暉・塩川文麟など圧倒的に円山・四条派や原・岸の流派の絵師が活躍する。

土佐派の資料には、門人であったと推定される高井豊泉・三宅年国などが模写した粉本が伝えられており、土佐光清や光文の手になるものなどと絡み合わせて考えると、幕末期には江戸の狩野派を押さえて土佐派が御所と密接な関係を結んでいたことを推測させてくれる。

（京都市立芸術大学教授）